
死神と魔王ともろもろと

黒月古城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と魔王ともろもろと

【Nコード】

N6427Z

【作者名】

黒月古城

【あらすじ】

この物語は別のss投稿サイトに僕がちまちま投稿していた物語です。会話文ばかりです、無駄に行数稼いでます。mottainaiのでこっちに載せることにしましたww

魔王。人類の永遠の敵、世界を破滅に導く悪の権化。今日もまた攻

めてくる勇者一行を観察し、迎撃体制を配下の魔物たちに指示していた魔王。ここまでは彼女の日常だった。魔王城に謎の男が現れるまでは

勇者たちが来るまでの間、本を読んで暇をつぶそうとしていた彼女の前に突如現れたのは………死神と名乗る男だった

異形の物語（前書き）

あらすじのとおり、この物語はとあるSS投稿サイトに

魔王「何者だ?!」 死神「死神DEATH」キリッ

という名で投稿したものです。投稿した後で読者の方から

「DEATHでは?」

というツッコミをもらいました。自分の無学さが憎いですww
ではどうぞ

異形の物語

「魔王様、勇者どもはまっすぐこちらに向かってきております」

いびつな背格好の人形はいう。世間一般的にいう呪いの人形の類だ。デスパペットという。手足にある操り糸は虚空に消え、どこからか操り主が人形を動かしているようだ。ところどころ破れたその体からは綿が飛び出し、人形にしては鋭利な爪には赤黒いものが付着している。

「そうか。勇者たちの進行方向上には誰が控えておる？」

「クヒヒ、魔王様お気に入りのオーガの牙城ですよ」

「クツクツクツ…見物だな。吸血コウモリの観察班を出せ、空から眺めてやるうではないか」

「御衣に…くきひやははは！！」バシユウウン

邪悪な笑いとともに人形は一瞬にして消えた。

私は彼らのような化け物をを統率し、従え、世界を破滅へ導くもの。魔界を統べる王、すなわち魔王である。

「ふう… やれ楽しみだ。 久しぶりに全力で戦えそうだな。 フフ… ハハハ！… さて、魔王っぽいことはした。 後は勇者が来るのを待つだけだが、どうにも暇だ。 先代様はどうやって暇をつぶしていたのだったか… そういえばスケルトンが書庫に新しい書籍を追加したと言ってたな。 おい！」

「お呼びで？ 魔王様？」

玉座の間の使用人用の隠し扉から生きた骸骨が現れる。 骸骨なので生きた、というのもいささか語弊があるのかもしれないが。 私の大切な部下の一人だ

「お前が追加したとか言う新しい本をもってこい。 全部だ」

「へい！ あっ」 コケッ バラバラ

呼び出した少々間拔けな手下に哀れみの視線を向け、私はその場で最善の指示を出す。

「……………誰か組みなおしてやれ」

「これはなかなか興味深い本だな…」

魔王といえど、感情を持った生き物であることに代わりはない。時々ここに攻めてくる、人間どもと同じ感性というものを、忌々しいが私たち魔族も持っているのだ。

私たちは人間に比べてかなり長寿、なので精神的な発達には彼らよりはるかに上だ。人間のやっていることがすべて幼稚に見えて仕方がない。だがそれでも人間の発想力や、意志の強さには目を見張るものがある。正直に驚き、賞賛を贈るべき人間の長所だと私は思う。

「へー、どんな話よ？」

「魔王と勇者が経済や産業の活性化で世界を改革しようとかいう物語だ。これはこれで話が面白い」

「おー、面白そうじゃん、見終わったら見せてくれ」

「そちらに読み終わったものがおいてある。好きに読め」

「ン、ども」

.....。

「.....って誰だお前ええええ!!!!!!」

「え?! だれかいるの?!」キョロキョロ

「お前だよ!!! お前! 黒マント黒ローブガイコツ仮面背中に大鎌

背負ったお前だよ！！　どうやって入った？！　うちの警備はザル同然なのか？！」

「なにそれこわいwwそんなやつこの世にいますかwwテラワロスww」

「だからああああ！！！！！！」

いつの間にやらそこにいたケラケラと笑う謎の男（？）。本当に何者だ？

「落ち着け落ち着けて。まあマテ茶でも飲め。小生は堂々とインターフォン押して玄関から入ったぞ？　警備のトロールのおっちゃんめっちゃ愛想いいな、おせんべ貰っちゃったww上司がしっかりしてる会社は居心地がいいとかいってたぞ。上司の弛まぬ努力の賜物だな」

「質問に答えよ！！　我は魔王ぞ！」

「死神DEATH」キラッ

「（うぜえ…）死神というからには誰かの魂を狩に来たのだろう？
この私の魂がほしいのか？」

「だめだ、ですをDEATHにするのは失敗だな。作者も疲れる、
アニメ版だと字がないからネタとして効果は薄くなってしまっ、い
いことなしかよ」シニガミシヨンボリ

「…燃えよ殲滅の焰…我が目の前の患者を焼き尽くせ！！ スルト
の吐息！！」

巨大な火の玉を手のひらに生成する。今までこいつのペースに乗せ
られてはいたが、私はれっきとした魔王だ。本気を出せば人間界も
一瞬で蒸発させることができる。それをしたところで益はないので
する気はないのだが

「ほくく、歴代最強ってのは聞いてたがな、思ったよりやるじゃん。
じゃあ小生も。クトウグアの咳。どうする？ 城ごと蒸発しとく？」

男が指パッチンをする。すると、男の指先にソフトボール大の火の
玉が発生する。圧倒的だ。この男の周りに渦巻いている強大と呼ぶ
にもおこがましいような力の奔流が私にこう告げていた。

負ける。

大きさを力は測れない、私が人間界を蒸発させることができるのならこいつはこの次元そのものを打ち滅ぼすことすら可能だろう

「（ツ……こいつ、次元が違う……歴代最強と歌われたこの私が、龍を目の前にした蟻のようではないかッ……）」

「ハイハイ若い女の子が火遊びとかしないの。ホイ、ノーデンスの鼻水」

ネーミング最悪の妙な術を発動する男。次の瞬間私の頭上から大量の若干ねばねばした液体が降ってきた。火の玉は鎮火された。おい、ところどころ緑色の謎の物体が混じっているぞ？

「

「はは、ちょっとやりすぎたかね。洗淨術ウォシユレッティー！」

今度はすさまじい勢いで水をぶっ掛けられる。次の瞬間には蒸発していた。こいつ、おちゃらけているが只者ではなさそうだ

「小生がここに来た理由、だったか。お前さんのご察しのとおり、小生は魂を狩に来た。だがそれはお前さんの魂ではない。ここに来る勇者の魂よ」

仮面の下の方が邪悪に歪むのが見えた気がした。

「勇者の魂………だと？」

「安心しろ、お前さんらの戦いには小指のつめ先の垢ほどにも興味はないし、「俺が機械兵だ！」とかいって武力介入もしない。ただただ見せてもらっただけって訳よ」ドヤア

仮面の下に鬼のようなドヤ顔が浮かんだ気がする。ここ数時間で私のツッコミスキルが急上昇したような気がする

「いちいち腹が立つ死ノ神にするぞ！？ ……なら何故勇者の元へ直接行かないのだ？」

「旅費削減」キツパリ

「うわぁなんて腹の立つ4字熟語」

「まあ勇者だしここで待ってれば絶対来るだろ？　だって勇者だし。まあただでここに居座るつもりはないぞ？」

「不必要に繰り返すな。というより居座るつもりなのか？！」

「炊事洗濯家事育児……以外なら何でもできる！」　バーン！

「ほとんど何も出来んじゃないか！！　無能の癖して私より強いと
いうのが本当に腹が立つな！」

「怒ってばっかだな、いつちょ笑わせてやる。死神魔道具・ニャル
ラト Tepp の攪り羽！　これは意識した相手を笑い殺すまで攪る魔
道具だ。加減はしとくから安心しろ。それ、コチヨコチヨ〜〜w
w」

「う？！　ふ、ハハハハハハハハ？！……わ、私にこんなこと
し…ウハハハハハ！！」　ヒーーーー

「ほゝお、いい顔すんじゃない」

「ああ？！　うくくっ、もうやめて…！」

「そっちの表情のほうが正直でまだ可愛げがあるな。まだ貴様は17年しか生きてはいないのだからそれくらいがちょうどいいんだよ。強張った顔じゃ着いてきてくれる部下も、友達もいなくなっちゃうぞ?」

「な?!なぜ私の年齢を!?　　ってか擦り続けるな!!　　プハハ!」

「悪魔で…もとい、死神だから、かな?　　ちなみに小生の死神暦と同じだ」

「ぜえ…………ぜえ…………」

「あ、ごめん、さすがにやりすぎたわ。ほれ、背中さすってやる」

「…………まったく…もうよい、好きにするがいい…………」

「まあ拒絶されても居座るつもりだったけどねww」

こうして私と死神と私の部下、そして勇者との物語が始まった

たまには外の空気を吸いたい今日この頃

死神「時に魔王よ」

魔王「何だ死神」

死神「お前生まれてからずっと引きこもってんのか？」

魔王「うるさい！ いちいち気に障る言い方をするな！ 王が玉座の間にいなければいろいろと都合が悪かるう。法定勤務時間が過ぎたら私もさすがに部屋に戻るが、城の外には出たことがないな」

死神「王ゆえに、箱入り娘だったわけか……引き籠もり街道一直線だねえ……そだ、今日どつか出かけてみないか？ ちょっとやってみaitいことがあるんだ。この小生とともに来い、魔王よ！」

魔王「断る！ っておいいろいろとまずくないかこれ」

死神「ピンポンパンポポポーーン 業務連絡です。アラクネさん、至急玉座の間にお越しく下さい。繰り返します、アラクネさん、至急玉座の間へお越しく下さい パンポンピンパッピポーー」

魔王「聞いてるのか?!」

死神「聞いてるよ〜聞いちゃいるけど聴いちゃいないな。右から来たものは左へ受け流すようにしてるんだ」

魔王「うっがああぁっあー！！！」

アラクネ「どうされましたか？」

死神「おおアラクネさん。今から魔王とちょっと出かけてくるから服とか身だしなみとか見てやってくれ。外出許可とかは小生が何とかする。リビングデッドの執務室で待機してるから、終わったら呼んでくれ」

アラクネ「承りました」

魔王「私の歌……もとい話を聴けええ！！」

数十分後　ボーン　　パッポーパッポーパッポー

アラクネ「お待たせいたしました死神様」

そこには角を除けば、かわいらしい格好をした普通の10代の女の子がいた。

死神「ほ~~~~~~~~お」

魔王「じ、じろじろ見るな変態」

死神「似合っているじゃないか。魔王にも衣装だなwww」

魔王「馬子にも、だろ?! 時に死神」

死神「なんだ?」

魔王「お前はそのままの格好で行くつもりなのか?」

死神「そうだが?」

死神・装備

黒マント E

黒ローブ E

ガイコツ仮面 E

魔王「ふざけるな!!」

死神「?!」

魔王「いまさら黒マント黒ローブガイコツ仮面なんぞ、魔界でもありえないぞ！　せめて仮面くらいとれ！　というか普通の服に着替える！　もしかしてその服しか持っていないとか？　ww」

死神「やかましい！　私服くらい普通にもっとるわ！　まあべつに付けなきゃいけないってわけじゃないけどさ、いちよう（何故かry）死神の制服なんだけどなあ…分かった、とるよ」

頭にかぶったフードを後ろに流し、仮面の鼻の部分に手をやる死神。すると仮面がどんどん小さく変形トランスフォームしていく。仮面が変形し終わると、今まで仮面の中に押し込まれていた死神の素顔が露になった。

死神「ふう、久振りに顔の皮膚が外気に触れたな」

魔王「ふ……ふ、ふざけるな！！」

死神「?!」

魔王「高貴なる魔族の王の隣にそんな無精髭ボーボーで髪ぼつさばつさの男がいてたまるか！！　一緒にいる私の身にもなれ！」

死神「うえ？！ あ、ああ、配慮が足らんかったな、すまん。なんせ死神始めてからほとんど仮面なんざとったことなくてな……」

魔王「もうよい！ ガーゴイル！」

虚空に向かって2回手をたたく。するとどこからともなくダンディな男が現れた

ガーゴイル「御前に」

魔王「こやつの身なりを整えよ。風呂にもぶち込んで清潔にせよ！
迅速かつ早急に！！」

ガーゴイル「承った。さあこちらへ死神殿。ホイホイ言われるまま私についてきたまえ腐ハハハハハ！！」

ガッツリ襟首を掴み、死神を引きずっていくガーゴイル。その表情にはご馳走を手に入れた獣のような爛々とした光が宿っている

死神「え？ ち、ちよつと待っているいと立場逆転してないかというかガーゴイル冗談だよマジで冗談ですよってうわー目が据わってるよ」

数十分後　ポーン　　パッポーパッポーパッポー

死神「ま、待たせたな……」

魔王「」キュン

死神「どした？」

魔王「汚いぞ死神！　チャームなんぞ薄汚い手を使いおって！！
魔法耐性の高い私だからこそ大丈夫だった……」

死神「はあ？お前にチャームなんか使ってどうすんだよ」

ガーゴイル「魔王様、死神殿は魅了呪文の類は使ってはおりませぬ。
私の心は死神殿にすっかり魅了されましたが」

死神「こいつ早急に切実に何とかしてくれ。次はやり過ごせる自信がない」

魔王「切実にムリ。そ、そんなはずはない！　ならなぜ……この心臓の動機は何だ？！」

死神「いや、小生に聞かれてもなあ」

ガーゴイル「（青いねえ）」

妹の成長を喜ぶかのような表情をガーゴイルは浮かべていた

もしかしくなくても、これってデート？（前書き）

黒月「死神、仕事サボってデートか？」

死神「悪漢に追われてはいないがな」

魔王「デートとは何だ？ 日付か？」

死神「小生が知るか」

もしかしくなくても、これってデート？

死神の必死の交渉（ほぼ恐喝）の結果、リビングデッドの許可も下り、私と死神は城下町に来ていた。人間界の城下町とほぼ遜色ない町並みが広がっている。先代魔王の努力の結晶といえるだろう。

勇者たちが攻めてくるときは一時的にほかの場所へと転移させる術式まで作られている。わが一族ながら素晴らしい出来だ。

そんな町並みに私たちはいた

通行人A「（何だあいつら…昼真っから見せつけてくれやがって…）

」

通行人B「（リア充大爆発しろ）」

魔王「さっきから視線を感じるのは気のせいなのか？ 死神」

死神「気のせいじゃないだろ。小生も自分に向けられる男どもの射殺すような視線が突き刺さっているのを感じている。しかし、魔界の城下町も結構栄えてるなあ。魔王の統治がうまくいっているせないかな」

魔王「褒めても何も出んぞ？　で、死神は何をしに街まで来たのだ？」

死神「ああ、自己紹介で小生、炊事選択家事育児が出来ないと言っただけだな」

魔王「ああ。今思い出しても腹が立つ。お前を殺せるならこの世でもっとも残虐な方法で殺してやりたいほどに」

死神「そう怒るな。話を戻すが、小生は出来ないのではなく、やったことがなかったんだよ。どうせ暇ないっちゃやってみつかあめな。その道具や本がほしいのと、あとこの世界を見てみたかった。お前の統治する、魔界という世界を」

仮面を外しているので、鬼のようなドヤ顔が直に見える。もはや苦情がくるレベルである

魔王「最後だけカッコつけりゃいいと思うなよ死神。四十路近くの

フレンチシェフと遜色ないドヤ顔をするな」

死神「とりあえず適当に歩いてみて気になるモンがあったら立ち寄るみたいなぶらり旅だ。行くぞ。いろいろあってもう昼前だ、飯屋を探すぞ」

魔王「スルーするな！ まったく……そういえばお金はあるのか？
というか食事が必要なのか？」

死神「まあ食わなくても存在はできるが味覚はあるんでな。……いいじゃないか、滅多に魔界に来てこうやって観光なんかできないかな。一応小生たちが使っている硬貨はある。珍しいもんでできるから高く売れるんじゃないか？」

死神が懷から巾着を取り出し、謎の物質を取り出す。硬貨のような形をしているが、そこからあふれ出す言いようのない何かに、私は少し寒気を感じた

魔王「変わった色をした硬貨だな……ってこれ！！ 高純度魔力結晶でできているじゃないか！！ 私ですらここまで大きなものは見たことがない！！」

死神「え、なにそれおいしいの？」

魔王「凄まじい力を発する魔力の結晶といわれる物質だ、手にしたものは圧倒的なチート能力を手に入れることができる。これのせいで一度魔界が滅びかけたことすらある。先々代の魔王が生涯をかけて、やっと戦争を鎮圧できたんだ……」

死神「（そっぴい先輩がずっと前にどっかに財布落としたとか言ってたっけ。帰ったら報告だな）　そうか。安全性も考えてあまり使わないほうがよさそうだな。だがしかし妙だな、普段はこれからそんな力は感じられんが？」

魔王「正直なところ私にもわからない。謎が多すぎるんだ。魔力の結晶と言ったが、実際は魔力とは違う、異質なものでできているらしい。並みの魔族では扱いきれないから研究もまったく進んでいないんだ。なるほど、死神の世界の物質なら異質なのも納得がいく」

死神「随分とエグいもんだっただな、これ」

魔王「だがある一定の大きさになると力は失われ、代わりに綺麗に光りだすんだ。装飾品の最高峰としても高値で取引されている。そうだな、5ミリほどで城一つは買えるな」

死神「この仕事が終わったら小生、魔界で暮らすんだ……」

魔王「ここが戦場でなくてよかったな、死神よ？」

死神「生きてるかも死んでるかもわからないような存在に言うか？
それに小生は死を司るもの、魂を狩るものだぞ？」

魔王「そうだな。フフッ」

死神「しょうがない、ここは魔王の城のバイトで稼いだこの世界の硬貨を使おう。こんなもんが魔界や人間界に広まったらエラいことになる」

魔王「掃除選択家事育児もできんお前が何で稼いだのだ？　　というか私に報告なしであいつらはなにやってるんだ…」

死神「戦闘訓練。スケルトンでも並の勇者なら対処できるレベルにまで上げておいた。今じゃわざとバラバラになって自らの体をビット化して、魔法弾でオールレンジ攻撃も行えるようになったぞ」

魔王「それなんてお兄さんだよ。そういえばスケルトンが組みなおされてるのを最近見ないな」

死神「自己修復もできるようになったからな。アラクネもだいぶ強くなったぞ。今じゃ糸で金属を切断できるようになってる」

魔王「どういう戦闘訓練をしたらそうなるんだ？　まあいい、昼食のあとはどこへ行くんだ？」

死神「そうだなあ……本屋だな。この世界の知識を少し詰め込んでおきたい。暇をもてあました死神の戯れだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6427z/>

死神と魔王ともろもろと

2012年1月10日12時52分発行